

昭和を思う

常務理事 安達勝雄

文芸春秋本年4月号に「消えた昭和」—日本人の無くした暮らしと心—と題して、昭和に我々が失った事柄に付いて、30名に近い人々のエッセイが載せられた。今年は昭和80年、昭和の年号は私の年齢、昭和とともに歩んできた。

昭和とは？ 良きにつけ、悪しきにつけ失ったものを眺めることとした。文春掲載の無くしたものを拾って見る。蚊帳、たき火、和式便所、ナイフ、原っぱ、紙芝居、駄菓子や、ラジオ（家族の輪の中心）、縁側、箒とちり取り、卓袱台、神棚、仏壇、蠅取り紙、押入、物売りの声、給料袋、書齋、半ドン、社員旅行、算盤、チップ、帽子、懐中時計、井戸端会議等、懐かしいものが顔を並べている。これに私なりに加えれば、町はずれの小川、日本式家屋、旧教育制度、(道徳、歴史)、旧社会制度(年功序列)、家庭の日の丸、家族制度と考えられる。これら失ったものは昭和の光があたり、大きく社会発展に貢献した反面、これが原因となり社会悪の遠因となった陰の部分もあった。これらに付きその功罪を眺めて行きたいと思う。

1) 生活様式の改善

昭和40年代以降、生活の向上により姿を消した蚊帳、和式便所、掃除用具、台所用品、風呂場等は、便利な、効率的な、また衛生的な用具に形を変えて日常生活の向上に大いに貢献しているが、その反面極端な衛生思想・安全第一主義となっている。農薬・医薬品・食品・原子力等は色眼鏡を透して見られるようになった。主婦が食料品購入の時は無農薬野菜を求め、賞味期限のあるものは、期限の長いもののみを購入し、食料品などは期限内にもかかわらず売れ残り、廃棄するような珍現象を起こしている。

2) 子供の遊び場の喪失

子どもたちは原っぱで、小川で群れて遊び、年上のものが指導者となり、遊ぶことで、子供社会が、子供相互の関係ができあがり、社会人としての第一歩を学んだものであった。

子供の遊び場の喪失は、子供達だけで成長して行くチャンスを失った。これが家庭内でのゲーム遊び、学習塾通いに変わってしまった。学校の校庭、神社、お寺の境内はよい遊び場であった。土に親しむこと、泥まみれになることは、子供のアレルギー防止、精神安定にも役立つのではあるまいか。最近都市郊外に土地を借り、美的百姓に従事する人が増えてきたが、これらは原っぱ、小川の喪失を補うものであろう。

3) 日本式家屋の喪失

都会の日本式家屋は昭和20年の空襲で殆ど焼かれてしまった。日本家屋は周りを廊下で囲まれて、襖と障子で区分され、大広間が必要になれば、障子、襖を取り払い大広間ができあがり、祝儀、不祝儀にも対応のとれる余裕のある構造であった。茶の間を中心として、どの部屋にも自由に行き来でき、一家の意志疎通などは全く意識しないでも良い構造であった。

戦後住宅の復興は、食糧の確保とともに最重要の問題であった。当初国民が露を凌ぐためには、世にいう兎小屋しか望めなかった。戸数を増やすことが重要であった。昔の日本家屋とはほど遠い、廊下などの余裕のない、2K、2DK、3DK等、経済的で、効率の良いアパートが林立した。戦後まで大家族であった日本の家庭は、経済の発展に伴い労働力の分散が起こり、所謂核家族の時代となってきた。3DKはこの時流に乗り、家、即3

DK。旧日本家屋を忘れてしまった。個室の集合体が家ということになってきた。働き手の主人は、家の管理、子供の教育は妻に任せ、働き虫となり、家はリビングルーム、子供は鍵のかかる個室となり、自らの居場所もない状況となってしまった。

鍵のかかる子供部屋は、諸悪の根元で、毎日、新聞テレビを賑わせる青少年問題の原因となっているのでは無かろうか。家庭内の意志疎通の為には、自由に出入り出来るように、日本家屋の茶の間が必要であり、鍵のかかる個室は問題で、消えてしまった日本家屋の機能を再考すべき時代ではなかろうか。

4) 旧教育方針

日本人は自らの意志で教育方針を転換した。旧方針では、習い覚えること、基礎の出来た後に、考える段階に入った。現在の方針は、個人の考えを持つことに終始する。中学、高校では自分の得意技を自覚、将来何を遣りたいか、意志を持つように教育される。基礎の出来ていないままに、自分の適性、才能を信じ世に出るが、現実との差が大きく、大量のフリーター、転職者がでるのであろう。ごく、ひと握りの英才(堀江もんのごとき)はでるだろうが、一般には問題が多い。特に道德教育、歴史教育の欠如は、愛国心の低下、倫理観の低下に繋がるものであろう。

現在の社会では、大学卒は即戦力を要求される様であるが、個人全てが完成された形で社会に出るのではなく、仕事を通じて自らの適性を発見し完成されて行くものであろう。理工系の大学では、いかにして技術を完成させるかその方法を教える所であった。中学、高校では基礎を教育し、大学では物事を考える場であって欲しい。旧制高等学校は、3年間は基礎教育と思考の場であった、今にして思えば贅沢品で無用の長物であったかも知れぬが、その良き面は参考にすべきでは無かろうか。

5) 旧社会制度

年功序列制度は、長年日本社会を管理してきた有効な方法であった。しかしながら最近の急速な技術革新の時代には、真に実力あるものがその能力を発揮出来ず、革新に対応出来ぬとの問題となってきた。また利益追求の為には、仕事により、パートタイマーの雇用が有利であり、また製品の寿命が短くなり、屢々製品を変える場合には、その都度専門のパートタイマーを雇用する方が有利となり年功序列制度は、パートタイマー雇用方式に変わりつつある。

しかしながら、年功序列方式にはドイツのマイスター制度に似た点もあり、熟練工の技術には、マニュアルには表しにくい技術があるのでは無かろうか。最近の自動車工業でのリコールの増加、JRの重大事故、その他工場に於ける事故続発はこの辺の事情を物語るものであろう。とくに安全、衛生については旧制度を参考とすべきでは無かろうか。

現在日本の問題点は

- * 貨幣価値経済よりの脱却
- * 自然の再認識
- * 環境問題
- * 父親の権威回復・子供優先主義の排除
- * 個人主義・利己主義・誤れるプライバシー
- * 異常なまでの潔癖性
- * 余裕の喪失
- * 便利の認識
- * もったいないの観念

これらの問題点は昭和の失った悪しき「陰」によるものであろう。この解決には、失った「昭和」のなかに意外なヒントがあるのでは無かろうか。

(元(社)日本プラント協会理事)